

大学生のアイデンティティ形成と他者の影響 —大学1年生の記述・対話・ブロックを通じた分析—

西上 一成（高知大学大学院 総合人間自然科学研究科 地域協働学専攻 2年）

俣野 秀典（高知大学 地域協働学部／学び創造センター）

1. はじめに

大学生という時期においてはアイデンティティを形成することが重要という指摘がされている（Erikson, 1959; 1968）。アイデンティティは、自己を他者とは違う自己と認識し、過去・現在・未来の自己も間違いのない自己であり、その自己を他者からも認識されているという自信と定義される。また、アイデンティティは社会構成主義的に他者との関係性やメディアなどから形成されると指摘されている（Gergen, 1994; 家島, 2006）。

本稿では、他者との相互の関係性が大学生のアイデンティティにどのような影響を与えるのかについて考察することを目的に実施する。

2. 対象・方法

対象者は高知大学地域協働学部1年生60名で、必修授業である「大学基礎論」「学問基礎論」を用いて全3回実施した。第1回は6月、第2回は7月、第3回は10月に実施し、対象者はペアでの対話形式で参加した。分析データは各回で回収される振り返りシートを用い、樋口ら（2022）の計量テキスト分析ツールである「KH Coder」を使用した。なお、分析に使用することを承諾した学生のみデータを使用している。

第1回は、他者からどのような影響を受けてきたか過去を掘り下げてもらうことを目的に実施した。はじめに、対象者は自身の価値観をリストから5つを選択する。次に、人生に影響を与えた他者を3人挙げ、その他者との関係性やエピソード、その他者が持っていると思う影響力や価値観を考えてもらう。最後に、最初に選択した価値観と選んだ他者との関係性を考えてもらうという流れである。

第2回は、自身のアイデンティティを言語化してもらうことを目的に行なった。その際に、アイデンティティを考える方法として親和性があり、言語化を支援する方法として、「LEGO® SERIOUS PLAY®」というメソッドを用いた（ラスムセンほか, 2016; Harmon, 2025）。

第3回は、自己が他者にどのような影響を与えてきたか、自己が他者にどのような影響を与えられるかを考えることを目的に行なった。はじめに、人生で他者に何らかの影響を与えたと感じた関係性やエピソードについて考えてもらった。その後、自身の影響力をキーワード化してもらった。

3. 結果

3-1 他者について

影響を受けた他者と影響を与えた他者をグラフ化したものが図1・2である。全体を通して「友人」が最も多い結果であった。影響を受けた他者では、母親などの家族や教師といった身近な他者や教育環境での年長者に関するものが多く挙げられた。影響を与えた他者では、後輩や兄弟姉妹が多く挙げられており、兄弟姉妹も弟や妹が多かったため、身近で自身よりも年少の他者が多かった。

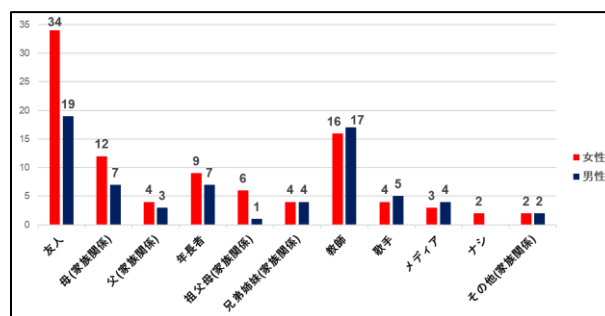


図1 影響を受けた他者。

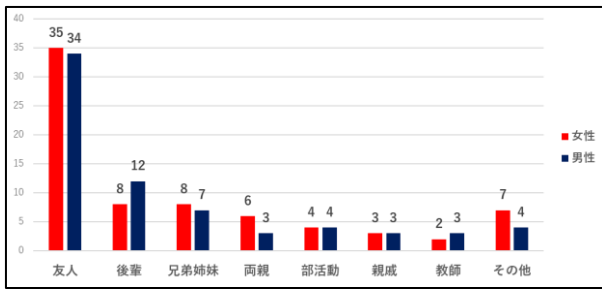


図2 影響を与えた他者.

3-2 他者とアイデンティティの関係性

他者との関係性がアイデンティティへ与える影響を考察するに当たって、本稿では KH Coder の対応分析を使用した。具体的にはアイデンティティの記述を他者からの影響または他者への影響を外部変数にして分析している。なお、対応分析を使用した場合、アイデンティティの記述および形成においてどのような他者への影響や意味付け（文脈）が特異的または顕著に影響を与えているかを分析することになる。

結果として、他者からの影響や他者への影響はアイデンティティに「アイデンティティを表現する際のネガティブ性」と「アイデンティティを現在の自己を基軸にしているか、未来の自己も含めているのか」という記述内容の時間軸の幅」というかたちで影響を与えていると示唆された。「ネガティブ性」は「他人の目を気にしてしまう自分がある」「常に崖っぷちの状況」といった記述や「常に考えて行動し、常に情報を発見して自分自身を成長させていく」「“私”が高い目標を叶えようと奮闘」といった記述の比較から推察した。「時間軸の幅」は「感情がそれぞれ周りに様々な影響を与えている」という今現在に関する記述と、「階段のように層になっていることが時間（人生）の流れを表現」という将来的な記述を比較から読み解いた。

4. 考察

ネガティブ性と時間軸の幅という特異的な影響を与えた理由について以下のように示唆する。

ネガティブ性は、感銘を受ける、または反面教師に出会うことを通して、その他者からの学びを自己に取り込もうとしている記述が見受けられ、その理想と現実の自己とのギャップによるものだと考えられる。時間軸の幅については、今の自己について記述する学生は、他者と共有や共感の関係性、情緒的サポートを行うという関係にあった。一方の将来的な自己を見据えた学生は、指導と尊敬の関係性、憧れや目標設定の関係にあったのではないかと考えられる。

しかし、ネガティブ性が高いほど他者に関する記述が多くなったため、他者に対する意識が高い、または受動性の問題とも考えられる。また、他者に与えた影響においては、大きくは読み取れなかった。これらについては、今後の課題としたい。

参考文献

- Erikson, Erik H. (1959). *Identity and the Life Cycle*. International Universities Press (西平直・中島由恵訳『アイデンティティとライフサイクル』誠信書房, 2011).
- Erikson, Erik H. (1968). *IDENTITY: Youth and Crisis*. W. W. Norton & Company. (中島由恵訳, 『アイデンティティ：青年と危機』新曜社, 2017).
- Gergen, Kenneth J. (1994). *Realities and Relationships: Soundings in Social Construction*. Harvard University Press (永田素彦・深尾誠訳『社会構成主義の理論と実践：関係性が現実をつくる』ナカニシヤ出版, 2004).
- Harmon, Dennis. (2025). Examining the Potential of LEGO® SERIOUS PLAY® for Understanding Identity. *国際文化* (7), pp.17-30.
- 樋口耕一・中村康則・周景龍 (2022) 『動かして学ぶ！はじめてのテキストマイニング：フリー・ソフトウェアを用いた自由記述の計量テキスト分析』ナカニシヤ出版.
- 家島明彦 (2006) 「理想・生き方に影響を与えた人物モデル」『京都大学大学院教育学研究科紀要』52, 280-293.
- ラスムセン, ロバート・蓮沼孝・石原正雄 (2016) 『戦略を形にする思考術：レゴ®シリアスプレイ®で組織はよみがえる』徳間書店.